

# ミステリ読書案内

2023. 2. 11 発行元

第446号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## かつての名作・傑作 その4

436号に続いて1970年代～1980年代にかけての作品の中で、私が数冊しか読んでいない作家の傑作、名作と思われる作品を紹介している。今回は、忘れられつつあるように感じられる三冊を選んでみた。

### 神田の古本屋街

昔ながらの古本屋からはかなり遠ざかってしまった。地方の古本屋は皆閉店してしまったし、神田の古本屋街には30年以上行っていない気がする。東京へ行く機会がないわけではないが、別の用事で走り回ることばかりで、ゆっくり古本屋廻りする余裕などない。退職してから

は、このコロナ禍なのでひたすら自粛の体制である。

この齢になったので、本を集めようという気持ちはまったくない。ただ一度ぐらいい手にとってみたいと思う本がないわけではない。ポケミスが一番古い版も見てみたい気がする。今どれくらいの値がついているのだろうか。またいつかは古本屋街を歩いてみたいと思う。

### 紀田順一郎「幻書辞典」

1982年三一

書房。その後『古本屋探偵登場』の題名で文春文庫に収められている。紀田順一郎は評論家、書誌研究者として活躍しており、作家としては本書がスタートになった。私が若い頃『幻影城』新人賞の候補になった時、選者の一人だったので、選評をいただいたという特別な関係にある人。本書には『殺意の収集』と『書鬼』の二編が収録されている。

主人公は神田神保町の古本屋街にある「書肆・蔵書一代」の主人・須藤康平。「本の探偵」を名乗っている。そして、店を手伝ってくれているのは大学生の小高根俚奈。『殺意の収集』では、中村典彦のエッチングが口絵として付いた高田書房版で限定私家版の堀井辰三『ワットオの薄暮』という本が問題の書となる。収集家の津村が江戸川橋図書館に寄託していたものが古雑誌にすり替えられていた事件。ニセモノ絡みなどもあって収集家の異常な執着心が根本のところ結び付いている。古書をテーマにした作品はどうしてもそうになってしまう。『書鬼』では、フランスの詩の解説本を売りに来た風光明美という女性から、戦前最初に出た『シートン動物記』全六巻他何冊かを探す仕事を頼まれる。本を探するのは古書店本来の仕事だが、ここでもたくさんの本の話で混乱していく。

### 上田廣「駅猫」

1980年大正出版。上田廣は戦前から鉄道の仕事に就きながら文筆活動をしていた人で、鉄道関連の小説を多数残している。ただ、推理小説と呼べるのは本書だけで、作者の没後にまとめられたもの。収録の6編は昭和39年から40年にかけて『交通新聞』に掲載された作品である。淡々とした描きぶりで、当時の世の中の様子がよく伝わってくる物語。

第一作の『闇服』は、蒸気機関車の話から始まる。SLの話は私ども年代にとっては懐かしい情景が思い出されるもの。若い人にとっては実感が伴わないと思うが…。当時の蒸気機関車は急坂で動輪が空転して上れなくなることが時々あった。倉橋機関士と北山機関助手が責任を取って自殺したように見える事件が起きた。倉橋の方は間違いなく自殺のようだが、北山の方は…。関わっている人達の捜査が進む。

表題作の『駅猫』は栄駅に棲む黒猫のこと。一時は、駅の貨物倉庫に出没する鼠の駆逐に活躍してくれていたのだが、役目を果たさなくなってきた。そこで駅員が相談して、夜の貨物列車に乗せて捨てることに…。次の日の朝、若い女性の死体が発見されて…。

### 戸板康二「グリーン車の子供」

1982年講談社文庫。戸板康二は演劇、歌舞伎などの

紹介、評論、エッセイなどでよく知られた人。途中から『名探偵・中村雅楽もの』を書き始め、謎解きを中心にしたミステリ作家としても認められるようになった。本書は昭和35年から昭和57年にかけての幅広い時期に『小説新潮』や『宝石』『小説現代』などに掲載した作品11編を集めた短編集になっている。『中村雅楽』シリーズとしては、『團十郎切腹事件』や『目黒の狂女』など何冊か出ている。

表題作の『グリーン車の子供』は日本推理作家協会賞を受賞した作品。八十歳を越えた歌舞伎の老優・中村雅楽は竹野記者と大阪からの新幹線のグリーン車に乗った。法要の帰りだった。前日、竹野記者は雅楽が久しぶりに舞台に出たらよいかどうか迷っている話を聞いていた。車内は混雑しており、二人の席は離れた形になり、雅楽の隣の席には女の子が座った。大阪駅で父親らしき人物が子どもの一人旅なので、よろしく頼むと伝言を残していった。その新幹線の車内での様子は…。ビュッフェで雅楽が竹野記者に語る驚きの決心とは…。日常のちょっとした出来事から推理を組み立てるアームチェア・ディテクティブの妙といった作品。